

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	藤原行成はなぜ妻を「孟光」と称するのか：日本における孟光像の一考察
Author(s)	章, 剣
Citation	中國中世文學研究, 59 : 69 - 79
Issue Date	2011-09-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051432">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051432</a>
Right	
Relation	



# 藤原行成はなぜ妻を「孟光」と称するのか

―日本における孟光像の一考察―

章 劍

はじめに

平安時代中期の廷臣、能書家として三蹟の一人に数えられる藤原行成（九七二―一〇二八）の日記『権記』には、次のような記述が見られる。

I. 長保三（二〇〇二）年二月廿九日条

諷誦。本家三百端、孟光百端、西方百端。（諷誦。本

家は三百端、孟光は百端、西方は百端。）

II. 寛弘二（二〇〇五）年四月三日条

詣中務宮、孟光詣賀茂。（中務宮に詣で、孟光は賀茂に詣づ。）

III. 寛弘七（二〇一〇）年三月十一日条

自及孟光・實經・宮犬・第三娘・幼女兒等料御明各

三千燈。（自及び孟光・實經・宮犬・第三娘・幼女兒等御明各おの三千灯を料とす。）

I は世尊寺で法会を行う際に諷誦料として、行成が布三百端、妻（孟光）と妻の母（西方）がそれぞれ布百端を納めたこと。

II は行成が中務宮具平親王に謁見し、妻（孟光）が賀茂神社に詣でたこと。

III は石山寺に詣で、行成及び妻（孟光）・息子の実經・良経（宮犬）・三女・末娘が御明（仏の前に供える灯火のこと）としてそれぞれ三千灯納めたこと。

本文中の「孟光」はいずれも妻に対して使われている。この孟光は中国後漢の隱者梁鴻の妻で、近年中国では「四大醜女」の一人に数えられる人物である。いったい行成はなぜ妻を「孟光」と称するのか、大変興味深い。そこで本論文では、その疑問を解明し、また日本における孟光像についても考えてみたい。

一、中国における孟光像

中国では、孟光故事の成立は後漢から六朝時代にかけて編纂された史伝まで溯ることができる。その故事が収められている現存する資料は以下の五つである。

- 『東觀漢紀』卷十八「梁鴻伝」
- 『高士伝』卷下「梁鴻伝」
- 『後漢紀』卷十一「後漢孝章皇帝紀上」
- 『後漢書』卷八十三「逸民」梁鴻伝
- 『列女伝』卷八「梁鴻妻伝」

これらの資料をまとめてみると、孟光に関して次のような記述が見られる。

- ①容姿は醜いが、徳行は高い。
- ②自分の意志で夫を撰ぶ。
- ③自ら隠居の服装や道具を用意する。
- ④夫の隠居の志を試す。
- ⑤夫に隠居するのを強く勧める。
- ⑥夫に礼を尽くす。
- ⑦「好道安貧」（道を好み貧に安んず）と評される。

隠者の夫に相應しい賢妻としての孟光像が描かれている。注目すべきはその中の②③⑤である。この四点から

は、自分の意志をはっきりと持ち、むしろ夫の梁鴻よりずっと「隠者」らしい孟光像が現れている。

上記の五つの史伝は梁鴻伝系統（梁鴻を中心とする『東觀漢紀』・『高士伝』・『後漢紀』・『後漢書』）と孟光伝系統（孟光を中心とする『列女伝』）に分けられる。二つの系統を代表する『後漢書』と『列女伝』を比較すると、孟光に関する記述には次のような違いが見られる。

	記述	後漢書	列女伝
①容姿は醜いが、徳行は高い		△	○
②自分の意志で夫を撰ぶ		○	○
③自ら隠居の服装や道具を用意する		○	×
④夫の隠居の志を試す		○	×
⑤夫に隠居するのを強く勧める		○	×
⑥夫に礼を尽くす		○	○
⑦「好道安貧」と評される		×	○

①については、『後漢書』は容姿が醜いことしか記していないので、「△」とした。

②③⑤の四点について、『後漢書』はすべて有しているが、『列女伝』は③⑤が見当たらない。⑥「夫に礼を尽くす」、所謂「斉眉の礼」を表す孟光の行為については、『後漢書』も記載はしているが、あくまでも妻にそうした行為をさせる梁鴻の「非凡人」（凡人に非ず）ということとを述べる文脈の中に位置付けられている（『梁鴻伝』系

統の他の三つも同じ)。これに対して、『列女伝』には、そういう文脈は見られず、妻孟光が夫を敬う「賢妻」のイメージだけを強調するようになっていた。

つまり、梁鴻伝系統では隠者としての梁鴻のイメージを強めるために、彼と同じように隱遁志向を持つ孟光像が描かれ、孟光伝系統では彼女自身を称えるために、清貧な生活に耐えながらも夫を敬い仕える賢妻としての面が強調されているのである。

右記のように、孟光故事は六朝までの史伝の中で定型化され、史実として確立し、唐代になると伝承・受容期に入った。

唐代以降、様々な書物から話を採集した類書が盛んに編纂されるようになった。この中には、『芸文類聚』・『初学記』・『白氏六帖』など、史伝から孟光故事を引用しているものも少なくない。これも孟光故事の伝承の一形態である。

また、唐代以降は詩文などにも様々な孟光像が多彩に描かれるようになっていった。唐代の詩文だけでも、白居易の十四例をはじめ百数十例ある。詳細は拙論「唐代までの孟光像の考察」(『中国学研究論集』第十五号、広島中国学会、二〇〇五年四月)に述べた。

なお孟光故事の翻案作としては、元代の雜劇には無名氏撰の『孟德耀举案齐眉雜劇』が挙げられる。その中で、高官の娘の孟光は、才学に優れていたが、貧乏である梁鴻と生まれながらに婚約しており、両親の反対にかまわ

ず梁鴻と結婚し、夫を支え、状元に及第するまでに至り、最後には一家は皇帝からの褒賞を受け、大団円になる。従来の孟光故事と異なり、才子佳人という異色の物語となっている。

## 二、孟光故事の日本への伝来

孟光故事はいつ、どのような漢籍によつて、どのような過程を経て日本に伝わったのか確定はできないが、ここでは、藤原行成が『権記』の執筆を開始した正暦二年(九九一年)までに日本に伝来した漢籍のうち、孟光故事の収められたものについて調べてみよう。

まず、前に述べた孟光故事の原典である五つの史伝に関して、平安中期の寛平三(八九一)年頃に成立した日本最古の漢籍目録『日本国現在書目録』には、『東觀漢記』(正史家)・『後漢紀』(古史家)・『後漢書』(正史家)・『列女伝』(雜伝家)の四つが著録されている。藤原行成がそれらによつて孟光故事を知っていた可能性は十分にある。また、『日本国現在書目録』雜家には様々な類書が著録されており、この類書から孟光故事は日本に伝わったとも考えられる。

例えば、『日本国現在書目録』雜家にも著録されている初唐の類書『芸文類聚』には、

東觀漢記曰、梁鴻郷里孟氏女、容貌醜而有節操。多求之、不肯。父母問其所欲。曰、「得賢婿如梁鴻者。」

鴻聞之、乃求之。女布襦裙。鴻曰、「此眞梁鴻妻也。」  
『東觀漢紀』に曰く、梁鴻の郷里の孟氏の女は、容貌醜くして節操有り。多く之を求むるも、肯んぜず。父母其の欲する所を問ふ。曰く、「賢き壻の梁鴻の如き者を得ん」と。鴻之を聞き、乃ち之を求む。女布襦裙にす。鴻曰く、「此眞に梁鴻の妻なり」と。）

と、『東觀漢記』から孟光の話を引きいている。そして日本の平安末期の成立とされる類書『幼学指南抄』には、

#### 孟氏布襦

東觀漢紀曰、梁鴻郷里孟氏女、容貌醜而有節操。多求之、不肯。父母問故。曰、「得賢壻如梁鴻者。」鴻聞求之。女布襦裙。鴻曰、「此眞梁鴻妻也。」

とある。この二つの書物の本文を対照してみると、傍線部が少し違ふ以外はほとんど一致する。『幼学指南抄』と『芸文類聚』をはじめとする中国類書との関係について、中島貴奈氏が、

本文同士の対照などから、『幼学指南抄』もやはり『藝文類聚』『初学記』『事類賦』といった先行の中国類書からの引用の多いことが明らかにされている。

と指摘しており、このことから『幼学指南抄』が『芸

文類聚』の孟光の話を用いていると考へてもよいであろう。

また、類書の性格をも持つ唐代の幼学書『蒙求』には「孟光荊釵」と題して『列女伝』から孟光の話を引きいている。この『蒙求』は『日本国現在書目録』に著録されていないが、『日本三代実録』によると、陽成天皇元慶二（八七八）年八月二十五日に、

是日、皇弟貞保親王於披香舍始讀蒙求。從四位下形式部大輔兼美濃權守橘朝臣廣相侍讀。小會置宴。右大臣特喚從五位上守左少弁巨勢朝臣文雄、文章博士從五位下兼行大内記越前權介都朝臣良香、從五位下行大外記嶋田朝臣良臣、正六位上行少内記菅野朝臣惟肖等數人。令賦詩、管弦間奏。夜分而罷。賜祿有差。（是の日、皇弟貞保親王披香舍に於いて始めて蒙求を読む。從四位下形式部大輔兼美濃權守橘朝臣廣相侍讀す。小會して宴を置く。右大臣特に從五位上守左少弁巨勢朝臣文雄、文章博士從五位下兼行大内記越前權介都朝臣良香、從五位下行大外記嶋田朝臣良臣、正六位上行少内記菅野朝臣惟肖等數人を喚び、詩を賦せしむ。管弦間奏す。夜分にして罷む。祿を賜ひて差有り。）

と、陽成天皇が当時八歳の同母弟貞保親王に『蒙求』を受講させたことが記載されている。これは日本での『蒙

求』に関する最古の記録である。この記述によると、教授の侍読役を務めたのは、漢学者でのち文章博士となつた橋広相であつた。講読が一段落ついた時、当時の学者でもある巨勢文雄・都良香・嶋田良臣・菅野惟肖等大臣たちを呼び出して宴会を催した。宴会は、漢詩を賦したり管弦を鑑賞したりしながら、夜中まで続いた。みなが思う存分楽しんでこの宴会の話題の中心は、やはり『蒙求』であつた。その時、都良香が賦した漢詩が『扶桑集』に残されている。この元慶二（八七八）年八月二十五日の出来事から見れば、当時『蒙求』が貴族の文人たちの中で相当に浸透していたと言える。

### 三、日本における孟光故事

前述のように、孟光故事は遅くとも九世紀頃までには日本に伝わってきていた。そしてそれを翻案する作品が約三〇〇年後の平安末期になつて現れる。

平安末期、藤原成範（？～一一八七）の撰といわれる『唐物語』に初めて孟光故事が取り込まれた。その後、鎌倉初期の元久元（一一〇四）年に成立した源光行撰の『蒙求和歌』、鎌倉中期の建長四（一二五二）年に成立した六波羅二藤左衛門入道の撰といわれる『十訓抄』にもその故事が取り込まれている。

ところで、孟光故事はその原典の史伝や類書、さらに幼学書の『蒙求』など様々な漢籍によつて日本に伝わってきたのだが、書物によつて故事の内容に違いがある。

そこで日本の翻案作がどれに基づいたのかということを考えてみると、やはり『蒙求』のではなからうか。『蒙求和歌』はその題名から言うまでもなく『蒙求』の翻案作であることがわかる。そして『唐物語』と『十訓抄』については、早川光三郎氏の考察によつて、いずれも『蒙求』と密接な関係を持ち、そこから素材を摂取していたことがわかっている。

ここで『蒙求』とこの三作品を比較してみよう。『蒙求』には、

#### 孟光荊釵

列女傳。孟光、梁鴻妻。姿貌醜、德行甚脩。鄉里多求娶、不肯。至年卅、父母問所欲。對曰、「亦欲節操如梁鴻者。」鴻因娶之。遂荊釵布裙、與鴻隱霸陵山中。雖雜偏保之中、每進食、常舉案齊眉也。（列女伝に）いふ。孟光は、梁鴻の妻なり。姿貌盛だ醜くして、德行甚だ修し。郷里の娶るを求むるもの多きも、肯せず。年卅に至り、父母欲する所を問ふ。對へて曰く、「亦節操の梁鴻の如き者を欲す」と。鴻因りて之を娶る。遂に荊釵布裙し、鴻と霸陵の山中に隠る。偏保の中に雑はると雖も、食を進むる毎に、常に案を挙げて眉に齊しくするなり。）

と、『列女伝』から孟光の話を引きいている。そこに見られるのは、「自分の意志で夫を選ぶ」（①）・「清貧に耐える」

②・「夫に礼を尽くす」③のイメージである。  
『蒙求和歌』では、この「孟光荊釵」の話が恋部に採り上げられ、次のような説話文と和歌が作られた。

孟光、容貌甚醜くありけれども、徳行ことに勝れたりき。郷里に多く此を聘へども、たやすくゆるす事なし。卅になる年、父母、「何なる色をや思ふ」と問へば、「家貧しくとも、心さま梁鴻のごとく物をえてしかなと思ふ」と云へりけり。梁鴻にあはせてけり。おどろのかんざし、ぬのの裾をきて、梁鴻が心に一事も不違、仕へけり。くひ物をすすむるに、つくゑあぐる事、斉眉。梁鴻、世をすさまじく思ひとりて、孟光と共に、霸陵山にこもりぬにけり。  
とにかくにわがおもふすちにたがはぬはおどろのかみもさもあらばあれ

説話文は『蒙求』をほとんどそのまま和文にしたが、傍線部は『蒙求』に見当たらず、光行による増補と思われる。そこには夫の梁鴻に対する孟光の気持ちが表示されている。和歌を見ると、「いずれにせよ、私の思う筋に違わなければ、ぼさぼさに乱れている髪であつてもそれはそれでよい。」と、梁鴻の思いが詠まれている。「おどろのかみ」は「孟光荊釵」の「荊釵」から得た発想で、孟光の「容貌甚醜」に着目した表現である。つまり和歌に詠

まれているこの話のポイントは、孟光の容貌の醜さと、夫の気持ちに違わないこと、の二点である。孟光の容貌の醜さについて、『蒙求』にも「姿貌盛醜」と記されているが、それはあくまでも「徳行甚脩」を際立たせるための役割を果たしているに過ぎない。前述した中国の孟光のイメージからも、その容貌に対する関心は窺えない。また、夫の気持ちに違わないことについていえば、それは光行が加えたもので、『蒙求』では直接言及されていないし、前述した中国の孟光のイメージの中にも見られない。

すなわち、この二点は日本的な視点によつて浮かび上がったものである。それを裏付けるかのように、『唐物語』と『十訓抄』の孟光故事にもその二点に着目している。『唐物語』第四「孟光、夫の梁鴻によく仕ふる語」には、

むかし、梁鴻といふ人、孟光にあひぐしてとしごろすみけり。この孟光、世にたぐひなくみめわるくて、これを見る人、心をまどはしてさはぐほどなりけれど、この夫をまたなきものにおもひて、かしづきうやまふこと思にもすぎたりけり。あさなゆふなにいゐがひとりて、けこのうつは物にもりつつ、まゆのかみにささげてねんごろにすすめければ、斉眉のたとぞいまはいひつたへたる。

さもあらばあれたまのすがたもなにならず

ふた、ころなきいもがためには  
心ざしだにあさからずは、たまのすがた、花のかた  
ちならずともまことにくちおしからじかし。

とある。孟光の容貌について、「この孟光、世にたくひな  
くみめわろくて、これを見る人、心をまどはしてさほぐ  
ほどなり」と強烈な口吻で述べたうえで、和歌に「それ  
でもよい。玉のように美しい姿でも何ほどのこともない。  
二心がなく、一途に私を仕えてくれるあなたがいてくれ  
るから。」と夫梁鴻の立場に立って、孟光が夫の気持ちに  
違わないことを称えている。その和歌は『蒙求和歌』平  
仮名本の和歌の先蹤と見なすことができよう。

『十訓抄』第五「朋友を選ぶべき事」五ノ七には、

そもそも、妹背のなからひは、借老同穴のゆゑあり  
て、ただうちある友にはなすらへがたければ、妻を  
求むるには、上臆は品をもえらぶべし。つぎさまに  
は見目・品をさきとすべからず。心をえらぶべきな  
り。

もろこしの梁伯鸞が妻孟光は、形きはめて醜かりけ  
れども、夫に仕へ随ふ道、二心なかりけり。夫、世  
を遁れて、霸陵山に入りける時、ともにつき随ひて、  
家の貧しきをもあなづらず、齊眉の礼までもねむご  
ろなるによつて、夫、志深かりけり。まことに、そ  
の姿、西施、南威をうつせりとも、夫を軽しめ、外

心あらんは、かへりてあたとなるべし。何の益かあ  
らむ。

秦中吟いはく、

富家女易嫁 富家の女は嫁し易し

嫁早軽其夫 嫁すること早うして、その夫を軽

んず

貧家女難嫁 貧家の女は嫁し難し

嫁晚孝於姑 嫁すること晩うして、姑に孝あり

などあれば、いみじく便りありても、夫のためなほ  
ざりならむ女、よしなくこそ。

とあり、「上臆」でない、「つぎさま」の人々が妻を選ぶ際  
には「見目・品」(地位)ではなく「心をえらぶべき  
なり」という教訓を説いている。その「見目」が悪くて  
も「心」がよい妻の例として孟光が挙げられているので  
ある。姿は醜いけれども二心なく夫に従い仕えた孟光は  
妻として相応しいと称賛される。その後、美人であるが  
夫に二心を持ち国を滅ぼすことになった西施と南威の話  
を対比的に採り上げること、孟光の容貌は醜くとも  
夫に従い仕える心の良さを更に強調している。

以上のことから明らかなように、『唐物語』『蒙求和歌』  
『十訓抄』において、いずれも容貌と心(夫に従う)の  
視点から孟光を捉えている。中国の故事はもともと筋立  
てを重視し、人の行動を客観的に描くことに主眼がある。  
孟光故事においても、孟光の行動を外から観察している

かのような視点で描写することに力が注がれている。一方、日本では中国故事を受容する際に、人の「情」を重んじて、登場人物の心をはつきりと描いている。『唐物語』の中に見られたような、外見の強烈な描写は「ふたごころなき」孟光の心をより強く印象づけるために、わざと大げさな表現をしたのだと考えられる。『蒙求和歌』や『十訓抄』が孟光のよい心とともに容貌に着目した話の構成、和歌となっているのも、対比の効果をねらったものなのであろう。

#### 四、『権記』における「孟光」の称呼について

さてここで冒頭に挙げた疑問、藤原行成はなぜ『権記』で妻を「孟光」と呼ぶのかに返ろう。これもやはり『蒙求』の影響を受けたのであろうか。

行成と『蒙求』との接点は文献上では未だ確定できないが、『宝物集』の「勸学院の雀は蒙求を囀る」という諺が夙に知られている。勸学院は、弘仁十二（八二二）年藤原冬嗣が一族の子弟のために平安京に創設した教育機関である。先の諺は、その勸学院の軒端の雀まで『蒙求』をさえざるようになるほど、学生たちが熱心に『蒙求』を勉強していたということを示唆するものである。当然、藤原一族である行成も勸学院で『蒙求』を朗読暗誦していたはずである。

『蒙求』の中に描かれる孟光は「賢妻」であり、行成がここから「賢妻―自分の妻」というふうなイメージを

派生させて、自分の妻を孟光と称したと考えることもできらるであらう。『十訓抄』でも同じように「賢妻―理想的な妻」というふうなイメージを派生させている。

ところで、中国の唐詩には自分の妻を「孟光」という例がいくつも見られる。特に白居易の用例が多く、次の三例である。

「香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首」其一

〔白氏文集〕卷十六

五架三間新草堂

石堦桂柱竹編牆

南簷納日冬天暖

北戸迎風夏月涼

灑砌飛泉纔有點

拂窻斜竹不成行

來春更葺東廂屋

紙閣蘆簾著孟光

五架三間の新草堂

石堦 桂柱 竹牆を編む

南簷 日を納れて冬天暖かく

北戸 風を迎へて夏月涼しく

砌に灑ぐ飛泉 纔かに点有り

窓を払ふ斜竹 行を成さず

來春 更に東廂の屋を葺き

紙閣 蘆簾 孟光を著けん

「冬至夜」〔白氏文集〕卷十八

老去襟懷常濩落

病來須鬢轉蒼浪

心灰不及爐中火

鬢雪多於砌下霜

三峽南賓城最遠

一年冬至夜偏長

老い去りて襟懷常に濩落たり

病み來りて須鬢転た蒼浪たり

心灰は爐中の火に及ばず

鬢雪は砌下の霜より多し

三峽 南賓 城最も遠く

一年 冬至 夜偏に長し

今宵始覺房櫳冷

坐索寒衣詆孟光

今宵始めて房櫳の冷かなるを覺  
坐まに寒衣もとを索もとめて孟光に詆とがす

「三年除夜」(『白氏文集』卷六十九)

晰晰燎火光

氤氳酒香

嗤嗤童稚戲

迢迢歲夜長

堂上書帳前

長幼合成行

以我年最長

次第來稱觴

七十期漸近

萬緣心已忘

不唯少歡樂

兼亦無悲傷

素屏畫居士

青衣侍孟光

夫妻老相對

各坐一繩床

晰晰として燎火光り

氤氳として酒香し

嗤嗤として童稚戯れ

迢迢として歳夜長し

堂上書帳の前

長幼合はせて行を成す

我が年最も長ずるを以て

次第に來りて觴を稱ぐ

七十の期漸く近く

万縁心已に忘る

唯に歡樂少きのみならず

兼ねて亦た悲傷無し

素屏は居士を画き

青衣は孟光に侍す

夫妻老いて相對し

各おの一繩床に坐す

室親、死爲同穴塵(生は同室の親爲り、死は同穴の塵爲り)と契り、さらに、

黔婁固窮士 黔婁は固より窮士

妻賢忘其貧 妻は賢にして其の貧なるを忘る

冀缺一農夫 冀缺は一農夫

妻敬儼如賓 妻は敬ひて儼おごそかなること賓の如し

陶潛不營生 陶潛は生を営まおごそかず

翟氏自爨薪 翟氏は自ら爨薪す

梁鴻不肯仕 梁鴻は仕ふるを肯ぜず

孟光甘布裙 孟光は布裙に甘んず

と、黔婁・冀缺・陶潛・梁鴻と孟光の四組の夫婦を挙げ、彼らのように、「庶保貧與素、偕老同欣欣」(庶こひわかはくは貧と素を保ち、偕老とも共に欣欣たらん)と、たとえ貧しくともいつまでも仲良く二人で暮らしていきたいと結ぶ。そういうわけで白居易は自分の妻を「孟光」と呼んでいるのである。

白居易(七七二〜八四六)の詩文集はその生前にすでに日本に伝わり、平安時代の貴族たちに愛読され、『源氏物語』『枕草子』をはじめとする平安文学にも浸透している。『日本国現在書目録』にも『白氏文集』『白氏長慶集』が著録されている。

どうやら白居易は梁鴻・孟光夫婦を理想的なおしどり夫婦と考えていたようだ。元和三(八〇八)年、彼は新婚の妻楊氏に詩を贈った。その「贈内詩」には、「生爲同

詩を書写している。その書跡は現在東京国立博物館に收藏され、国宝（藤原行成筆白氏詩卷）に指定されている。そこで、筆者は行成が『権記』で妻を「孟光」と呼んだのは白詩の影響を受けたものであると考える。

日本の作品の中に、妻を「孟光」と呼ぶ例は他にもある。慈光寺本『承久記』には、

建久九年午戌十二月下旬ノ此相模川ニ橋供養ノ有シ  
時聴聞ニ詣玉テ下向ノ時ヨリ水神ニ領セラレテ病患  
頻ニ催シテ半月ニ臥シ神疲嘔メ命令ハ限ト見ヘ給フ  
時孟光ヲ病床ニ語テ曰ク半月ニ沈ミ君ニ階老ヲ結テ  
後多年ヲ送キ今ハ同穴ノ時ニ臨メリ

とあり、源頼朝が相模川の橋供養の際に倒れ、妻北条政子を病床に呼んで最期の言葉述べている場面を描いている。その中で政子を「孟光」と呼んでいる。これもやはり『権記』と同じ、白詩の影響を受けた称呼であろう。<sup>(10)</sup>  
なお、中国では宋代以降、『蒙求』の「孟光荊釵」に影響を受けた自分の妻の謙称、荊妻・拙荊・賤荊・寒荊・荊婦・荊室・荊人・山荊などといった呼称が多く登場した。日本でも荊妻という呼称が使われた例が見える。

### おわりに

中国では孟光故事の流布は唐前の形成期と唐以降の伝承・受容期に分けられる。形成期には『東觀漢紀』・『高

士伝』・『後漢紀』・『後漢書』・『列女伝』といった史伝を中心に、隱遁志向と賢妻像との両面性を持つ孟光像が確立した。唐代以降、その伝承と受容は次の三形態あり、すなわち類書（原典の引用）・詩文（典拠としての利用）・翻案作（孟德耀举案齐眉雜劇）である。

漢籍の舶来によって、孟光故事は日本に伝わった。平安中期に成立した『日本国現在書目録』には当時すでに日本に伝わった数多くの漢籍を著録している。その中には、孟光故事に関連する史伝（『東觀漢紀』・『後漢紀』・『後漢書』・『列女伝』、類書（『芸文類聚』など）、詩文（『白氏文集』・『白氏長慶集』など）も含まれている。

また、『日本国現在書目録』に著録されていないが、『蒙求』も先に検討したように日本に伝わっていることがわかっていく。

孟光故事に関して、日本で最も強い影響を与えたのは『蒙求』であろう。平安末期から鎌倉時代にかけて成立した『唐物語』・『蒙求和歌』・『十訓抄』には、いずれも『蒙求』に基づく孟光の話が見られる。しかしこれらの作品に描かれた孟光像は、日本独自の視点すなわち容貌と心（夫に従う）に焦点があり、中国とは色の違うものである。

しかし、藤原行成はなぜ自分の妻を「孟光」と呼ぶのか、ということに関しては、白居易の詩にすでに先行用例が見られることと、行成が白居易の詩を書写していたことから、『蒙求』の影響と言うよりはむしろ白居易の詩

の影響を受けてのことと結論づけたい。

注

- (1) 渡辺直彦、厚谷和雄校訂『権記』(『史料纂集』古記録編、続群書類従完成会、一九七八〜一九九六年)を参照。
- (2) 明・臧懋循輯『元曲選』(中華書局、一九六一年)所収。
- (3) 清・黎庶昌輯『古逸叢書』影旧鈔本(日本東京使署刊、一八八四年)を参照。
- (4) 『芸文類聚』卷六十七衣冠部「裙襦」(中文出版社、一九八〇年)を参照。
- (5) 台北故宫博物院蔵『幼学指南抄』卷十八「章服上」裙(『古辞書研究資料叢刊』第十四卷、大空社、一九九六年)を参照。
- (6) 中島貴奈『幼学指南抄』と類書―中国文化受容の一つの「かたち」―『静脩』第三十九卷一号、京都大学図書館機構、二〇〇二年五月)を参照。
- (7) 『蒙求』は古人の逸話を集めて韻字で並べる故事集であり、類書とも見ることができ。そこで『崇文総目』以降、歴代の公私書目はすべてそれを子部類書類に著録している。
- (8) 『日本三代実録』卷三四(『国史大系』第四卷、吉川弘文館、一九八三年)を参照。
- (9) 『扶桑集』卷九(『群書類従』第八輯卷一二六、続群書類従完成会、一九八〇年)を参照。
- (10) 早川光三郎『蒙求』「蒙求解説」(新釈漢文大系、明治書院、一九七三年)を参照。
- (11) 台北故宫博物院蔵上巻古鈔本『蒙求』(池田利夫『蒙求古

註集成』上巻、汲古書院、一九八八年)を参照。

- (12) 新編国歌大観平仮名本『蒙求和歌』(『新編国歌大観』第十巻、角川書店、一九九二年)を参照。なお、『蒙求和歌』には平仮名本と片仮名本があるが、「孟光荊釵」の話に関しては、両本の説話文の内容はおおむね同じで、そして片仮名本は和歌を欠くので、ここでは平仮名本のみ挙げる。
- (13) 小林保治訳注『唐物語』(講談社、二〇〇三年)を参照。
- (14) 浅見和彦校注『十訓抄』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年)を参照。
- (15) 『宝物集』(明治書院、新日本古典文学大系、一九九三年)を参照。
- (16) 那波本『白氏文集』(平岡武夫等編『白氏文集歌詩索引』下、同朋舎出版、一九八九年)を参照。
- (17) 『白氏文集』巻一(前掲注15)を参照。全三十句。
- (18) 荻原さかえ「慈光寺本『承久記』における政子呼称に関する一考察」(『駒澤國文』、第三十四号、駒沢大学文学部国文学研究室、一九九七年二月)がある。なお、氏はその呼称の由来を『蒙求』に求めている。